

か分かりません。この目には見えない本質的転換のことを「兆し」といって、「易経」の中で繰り返し述べているのです。

しかし、普通の人は分からなくとも、国を治め、民を治めるリーダーはその兆しをしつかりと見極め治世にあたらねばなりません。古来、「易経」は君子の心得、また帝王学としても読み継がれてきました。この「君子」をいまの時代に置き換えると、国のリーダーである政治家、会社のリーダーである経営者はもちろん、その道のプロも当てはまると思います。飲食業の人ならば、たまたま入った店が、「いまはお客様が少ないが、いずれ流行る」とか、「いまは話題になって流行っているが、半年後には廃れる」とか、理由も含め、その兆しを見極められてこそ本物のプロというものです。

しかし、この兆しはどうやって見極めたらよいのでしょうか。

易には三つの意味があります。

変易（森羅万象すべて変化する）

不易（その変化の法則性は変わらない）

易簡

（変化の法則性を知れば、天下の事象も分かりやすく、応用するのも簡単である）

「君子占わず」という言葉があります。が、君子は占いに頼らないという意味ではなく、「易経」をよく学んで変化の法則性を知れば、兆しを見極め、その時々において適切な判断や行動をとることができるという意味です。これを「時中」といいます。

時は朝昼晩、春夏秋冬と、刻々と変化していきます。万物が育成される夏には夏にぴったりの行動があり、不毛の冬には冬に合った行動があるのです。人生においても進むべき時は進み、退くべき時は退き、止まるべき時は止まる。この「止まるべき時に止まる」ということこそ、今回のテーマの「節の越え方」といえるでしょう。

「易経」における陰陽と吉凶の考え方

本格的に「易経」の内容に入る前に、もう少し基本的概念についてお話しさせていただきます。

「易経」は吉凶の概念に触れた最古の書物です。現代では占いやおみくじで吉が出るのと良いことが起こり、凶が出るのと悪いことが起こると考えられています。ですが、「易経」にそんなことは書いてありません。あるのは、吉は亨、凶は亨らない。それだけです。「亨る」とは「物事が通じる、成り立つ」という

ことであり、吉「通じない、成り立たない」は凶、としています。

そこで吉と凶の分け方です。「易経」では吉凶の間に「悔」と「吝」があり、悔は吉に存し、吝は凶に存す、とあります。

どういうことか。例えば小さな失敗をした時、大い後に悔して改めれば大事には至らず、「まあこのぐらいいいや」と改善を惜しみ嫌がると、やがて考えもしなかった大事件へと発展する。企業でいうクレームが最も分かりやすい一例だと思えます。

陰陽は「易経」の根本概念です。その考え方の大事なポイントは、陰と陽は別々のものではないということ。これを押さえておく、「易経」が理解しやすくなります。一つのものに、陰の面と陽の面があるという考え方もあり、はじめにある太極は宇宙でもあり、一つの物、事象とも考えられます。仮に世の中のものすべてを陰と陽に分けると、天は陽で、地は陰。男性が陽で、女性が陰。経営者は陽で、従業員は陰。明るい、賢い、強いは陽、暗い、愚か、弱いは陰です。

陰と陽は表裏一体であり、その両方がなければ物事は成り立ちません。男性だけ、女性だけでは社会は成り立たないし、会社も経営者がいて従業員がいるから営んでいきます。人間もまた陰陽両方の気質を持っていて、時に合わせてどちらかが強くなったり、弱くなったりするので。

また陰陽は転化します。例えば母親と息子の場合、性別としてみると、息子が陽で母親が陰になりますが、親子としてみると、母親が陽で息子は陰になる。視点や状況が変われば転化し、また陰と陽は常に対立し合って作用し、変化が生じます。

物事はすべて極めると質的転換が起こります。この大宇宙が常に変化し続けるのと同様、「吉・凶・悔・吝」も常に変化し、最終的に吉が極まれば凶に転じ、凶が極まればやがて吉に転じます。人間は順境にあっても逆境にあっても、その状態は十年も二十年も続くわけもなく、必ず変化するのです。必ず変化するからこそ、人間も社会も成長と発展があるともいえるでしょう。

新しい生命を生み出す発展させる龍

私が「易経」に出合ったのは二十二歳の時。冒頭の「乾為天」にある龍の話に魅せられたからです。龍が成長していく六つの段階——それは君子が志を達成していく過程そのままに当ては